

芥川の「開化」思想に見られるブラウニングの影響

向山義彦

日本の歴史物語は芥川に於てその頂点に達したものとみることができ
る。和漢洋三つの学を踏まえて題材を博く古今東西に漁った芥川は又同時
に物語をして物語たらしめる語り手としての傑出した才幹を持った作家で
あった。この才幹は西洋近代の文学から学び取ったものであってこの意味
に於て芥川は日本文学の近代化の頂点に立つのである。芥川の歴史物語
は、(1) 王朝時代、(2) キリシタン時代、(3) 江戸時代、(4) 中国の歴史
上の夫々の時代、(5) 明治開化時代の五つの時代背景に大別される。この
ように時代背景を異にしても夫々の物語の中に共通して貫いている特色は
物語が主題の展開によって進展すると言う近代文学の特色を示しているこ
とである。古い日本の伝統的題材と新しい西洋文学の主題の展開と言う技
法を融合して日本文学の近代化に成功をもたらしたのである。

このように東西文学の接地点に立つ自分の使命を強く自覚した芥川は日
本の近代化の端緒となった「開化」の時代を背景にした物語りを書き、そ
の物語りの主題の展開の中に自らの信念を吐露して居るのが注目される。
数多い「開化」物の中でその題に直接「開化」という語を附したものは
「開化の殺人」と「開化の良人」である。この三つの作品のうち「開化の
良人」とブラウニングの「My Last Duchess」との関係はすでに島田謹二
氏によって指摘されて居るが（『日本文学と英文学』、教育出版センター、昭和
48年）、「開化の殺人」の比較文学的考察はこれまで見落されて来たよう
である。然しこの「開化の殺人」もブラウニングの影響の下に書かれたもの
と思われる。ブラウニングの殺人の物語である「The Laboratory」がその
台本である。この二つの作品、「開化の殺人」と「The Laboratory」を読

み較べてみるといくつかの重要な共通点が見出される。

ブラウニングの「The Laboratory」は最初「The Bells and Pomegranates」一巻の中に「The Confessional」と一緒になって「France and Spain」と言う題名で発表されている。ブラウニングのこの Confessional (告白) が示すように芥川の「開化の殺人」も遺書で「告白」と言う形になっている。そして表現法としてはどちらも同じように dramatic monologue (劇的独白) を用いて居る。殺人の手段としては共に毒殺の方法が採られている。殺人の動機も共に嫉妬である。

以上の共通点の他にもっと微細な点に於てブラウニングとの関係があることに気がつく。芥川の中作中の殺人者は「ドクトル」であるがブラウニング自身も医学或は医者に多大の関心を持っていたことはその経歴と作品が示す通りである。ブラウニングは当初新しいタイプの劇作者になろうと志した人である。そして色々の歴史物語を劇化した人である。そして、ブラウニング自身は精力抜群の容貌魁偉な英吉利紳士であった。これらのことを念頭において芥川の「開化の殺人」の冒頭にみられるこの「ドクトル」紹介の言葉を読んでみるとこの「ドクトル」の背後に詩人ブラウニングの姿が二重写しになっているように思える。

「彼の人物性は、下の遺書によっても幾分の説明を得るに相違ないが、なお二、三、予が仄聞した事実をつけ加えておけば、ドクトルは当時内科の専門医として有名だったとともに、演劇改良に関しても、ある急進的意見を持っていた、一種の劇通だったと言う。現に後者に関しては、ドクトル自身の手になった戯曲さえあって、それはヴォルテールの Candide の一部を、徳川時代の出来事として脚色した、二幕物の喜劇だったそうである。

北庭筑波が撮影した写真を見ると、北島ドクトルは英吉利風の頬鬚を蓄えた、容貌魁偉な紳士である。本多子爵によれば、体格も西洋人を凌ぐばかりで、少年時代から何をしても、精力抜群をもって知られて言たと言う。そう言えば遺書の文字さえ、鄭板橋風の奔放な字で、その

淋漓たる墨痕の中にも、彼の風貌が着取されないこともない。」

この紹介の辞に続いて芥川は「もちろん予はこの書を公にするに当って幾度の改竄を施した。」と言っているのが如何にもブラウニングの台本と彼の作品の関係を印象づけているかのようである。このようにブラウニングの「The Laboratory」との関係が色々の点からうかがえるのであるがもっと深く観察してみるとこの物語は単に「The Laboratory」からの影響のみならずブラウニングのもう一つの殺人告白の独白詩である「My Last Duchess」からの影響も読み取ることができる。

「My Last Duchess」に於ける主要人物は公爵とその公爵夫人であるが芥川の「開化の殺人」にも子爵とその子爵夫人が重要な人物として登場している。「頭上の紫藤は春日の光を揺りて垂れ、藤下の明子は凝然として彫塑のごとく佇めり」と言う子爵夫人の少女時代のあどけない様子はブラウニングの公爵夫人のあどけなさを反映したもののように思える。そして「予が殺人の動機なるものは、その発生の当初より、断じて単なる嫉妬の情にあらずして、寧不義を懲し不正を除かんとする道德的憤激に存せし事を」と言う弁解に至ってはブラウニングの公爵の弁の中に見られる casuistry をそのまま引き写したようである。ブラウニングは「The Laboratory」に「ANCIEN RÉGIME」と言う副題をつけているがこのような時代区分的表現は文明開化期と言う時代区分に連なるものを暗示している。更に「The Laboratory」と「The Confessional」は「France and Spain」と言う二つを一つに組み合わせた一対の詩として発表されているのでこれが芥川の「開化の殺人」と「開化の良人」と言う一対になっている「開化」二作品に反映されているものと思われる。この二つの作品、「開化の殺人」と「開化の良人」の一対性はこの二つの作品に共通して出てくる人物、背景等によって更に裏付けされている。「開化の殺人」で登場する主要人物は本多子爵であるが「開化の良人」に登場する主要人物も同じ本多子爵である。唯前者に於ては本多子爵は若い子爵として登場するのであるが後者に於ては後年年老いてからの老子爵として登場するのである。この考若二

人の子爵が同一人として考えられているのは次のような人物描写からでもうかがい知ることができる。

「本多子爵は壮年時代の美貌が、まだ暮方の光のごとく肉の落ちた顔のどこかに、漂っている種類の人であった。が、同時にまたその顔には、貴族階級には珍らしい、心の底にある苦勞の反映が、その思わげな陰影を落していた。私も先達でも今日の通り、ただ一色の黒の中にものう懶い光を放っている、大きな真珠のネクタイピンを、子爵その人の心のように眺めたとする記憶があった。」

同様に人物の共通性についてのもう一つの例証は前者に於ては殺人役を演ずるのは子爵の友人である「ドクトル」であるが後者に於ても子爵の友人である「ドクトル」が登場してくる。後者に於ては殺人役として出てくるのではないがこの「ドクトル」は子爵と一緒に「中村座を見物した帰り途に、（中略）当時柳橋にあったいくいね生稻へ一盞を傾けに行った」のである。物語りの背景の共通点としては、「開化の良人」の中の銅版画に画かれた筑地居留地は「開化の殺人」の中でも「半夜行人稀なる筑地居留地を歩いて……」とその月の夜景が描かれている。

このようにブラウニングの一对の詩が芥川的一对の物語に与えた影響を見ることができるのであるがこの影響の意義はこのような作品構成の外観上の共通、相似点にあるのではなく寧ろ作品の内部に隠された芥川のブラウニングへの志向態度である。日本の文明開化、つまり近代化に寄与する所大なるものありと思われたブラウニングの詩の持つメセジに対する芥川の姿勢である。

「開化の殺人」も「開化の良人」も本質的には男女の三角関係の物語である。そしてその中心命題は芥川が「開化の良人」の中で繰り返し、繰り返し言及する所の「アムワル愛のある結婚」であるかどうかということである。「アムワル愛のある結婚」でなければ結婚でなく、随って離婚しても当然であり、猶且つ「アムワル愛」のある第三者はその「アムワル愛のない結婚」を殺人によって破壊しても

よいと言う命題を扱っているのである。この命題はブラウニングの「My Last Duchess」にも見られるのであが、むしろこの命題をはっきりと押し出しているのは「The Statue and the Bust」である。このように観察してみると「開化の良人」には「My Last Duchess」に加えて「The Statue and the Bust」の影響が強く表われている。^{アムウル}「愛のある結婚」を至上善としたのはブラウニングであり、その反対の^{アムウル}「愛のない結婚」を至上悪としたのも又ブラウニングである。明治開化の日本を文明に導くために必要であったのは^{アムウル}「愛のない結婚」と言う「旧来の陋習を破り」、^{アムウル}「愛のある結婚」と言う「天地の公道に基づく」ことであった。

然し、芥川はブラウニングの詩を読み、そのような^{アムウル}「愛のある結婚」が至上善であって、これこそ開化の日本がその近代化のために必要とするものであると言うブラウニングのメセデを自ら読み取ったのであろうか。芥川は西洋の詩を読むことの難しさを時々嘆いている。例えば

「僕の詩歌に対する眼は誰のお世話になったのでもない。斉藤茂吉にあけてもらったのである。もう今では十数年以前、戸山の原に近い借家の二階に「赤光」の一卷を読まなかったとすれば、僕はいまだに^{みみずく}耳木兎のように、大いなる詩歌の日の光をかい間見ることさえできなかったであらう。ハイネ、ヴェルレエン、ホイットマン、——そういう紅毛の詩人の詩を手あたり次第読んだのもそのころである。が、僕の語学の素質は彼らの内陣へ踏み入るにはもちろん浅薄を免れなかった。のみならず僕に上田敏と厨川白村とを一九にした語学の素養を与えたとしても、果して彼らの血肉を^{くら}啖い得たかどうかは疑問である。（僕は今もなお彼らの詩の音楽的效果を理解できない。稀に理解したと思うのさえ、指を折てみれば十行ぐらいである）このゆえに当時彼らの詩を全然読まずにいたとしても、必ずしも後悔はしなかったであらう。」

芥川はハーンを我が国英文学の学徒にとって最良の師であると賞讃し（「角川全集」、4巻、243頁）そのハーンから直接教えを受けた上田敏、厨川

白村を大変尊敬していた。この二人の学匠によって明治大正の両時代にブラウニングは日本に導入されたのである。殊に白村は「近代の恋愛観」を朝日新聞に発表して一世を風靡するのである。この恋愛論の中でブラウニングの「Love is best」と言う有名な句が引用されているので「愛のある結婚」^{アムウル}を至上善とするブラウニングのメセジこそ日本を文明開化に導く原動力であると喧伝されることになるのである。然し白村がこの「近代の恋愛観」を発表したのは大正十年であって芥川が「開化の良人」を発表したのはそれより二年前の大正八年である。芥川は白村によってブラウニングの至上善に「目を開かされた」とは思われぬ。芥川にその「目を開かせた」のは上田敏である。上田敏の「うづまぎ」の中にはブラウニングの「The Statue and the Bust」が興味深く紹介されている。大正2年7月一高を卒業し、9月には東大に入ることになっている芥川は8月に次のようなことを恩師広瀬雄宛に書き送っている。

「ぶらうにんぐはやめに致し候ぶらうにんぐさいくろびじあによりて読むつもりに候上田敏氏のすきな『彫像と半身像』(The Statue and the Bust)は何度かよみかえし候ほかのよりもやさしいような気が致し候上田さんもやさしいからすきなんじゃないかとも思ひ候ぶらうにんぐの代りに鷗外先生の『分身』『走馬澄』『意地』『十人十話』等よみ候……」

このように芥川は上田敏の紹介によって「The Statue and the Bust」を何回も読み直し読むことになったことが明である。

上田敏によって唱道され、次で白村によって一世を風靡するまでに喧伝されることになる「愛のある結婚」^{アムウル}に基づく日本開化論に対して芥川はどのような反応を示したのであろうか。芥川は白村の「近代の恋愛観」が出る前にすでに「純粹の愛のみの結婚」^{アムウル}と言うことは現実には在り得ないと「開化の良人」の中で結論を出し、その上に恋愛には競争者、つまり第三者が介在することになり、第三者を排除して恋を勝ち得ると言うことがすでに本質的にはエゴイズムそのものであり、このような自己主張、利己心

が果して「旧来の陋習を破り、天地の公道に基く」所以であって日本を文明開化に導く道であろうかと懸念しているのである。「開化の殺人」に於ては「旧来の陋習」のゆえに恋人に愛を告げ得なかつた苦しみを次のように言う。

「予は訣別に際して、明子に語るに予が愛をもってせんとせしも、厳肅なる予らが家庭は、かかる機会を与うるに吝なりしとともに、儒教主義の教育を受けたる予も、また桑間濮上の譏を懼れたるをもって、無限の離愁を抱きつつ、孤笈飄然として英京に去れり。」

そしてイギリスに留学し、キリスト教に接したため恋を肉身的感情に止揚することができるようになり、恋人を妹のように見ることができるようになったと言うのである。然し、

「予が妹を、斯る禽獣の手に委せしめ給いしは、何ぞや。予は最早、この残酷にして奸譎なる神の悪戯に堪うる能わず。誰かよくその妻と妹とを強人のために凌辱せられ、しかもなお天を仰いで神の御名を称うべきものあらん。予は今後断じて神に依らず、予自身の手をもって、予が妹明子をこの色鬼の手より救助すべし。」

と言うようになるのである。そして更に「予が殺人の動機たるものは、その発生の当初より断じて単なる嫉妬の情にあらずして、寧不義を懲し、不正を除かんとする道徳的憤激に存せし事を」と言うようになるのである。そしてその「道徳的憤激」は更に「すでに彼を存するの風を頰し俗を濫る所以なるを知り、彼を除くの老を扶け幼を憐む所以なるを知る。ここにおいて予が殺害の意志たりしものは、徐に殺害の計画と変化し来れり」となるのである。然しこの「道徳的憤激」に隠された愛の正体は遂に次のような「告白」となるのである。

「予は本多子爵を殺さざらんためには、予自身を殺さざるべからず。されど予にしてみても予自身を救わんがために、本多子爵を殺さんか、予は予が満村恭平を屠りし理由を如何の地に求めむべけん。もしまた彼を毒殺したる理由にして、予の自覚せざる利己主義に伏在したるものと敵さんか、予の人格、予の良心、予の道德、予の主張は、すべて地を払って消滅すべし。これ素より予のよく忍び得るところにあらず。予はむしろ、予自身を殺すの、遙かに予が精神的破産に勝れるを信ずるものなり。故に予は予が人格を樹立せんがために、今宵「かの丸薬」の函によりて、かつて予が手に僵れたる犠牲と、同一運命を担わんとす。」

一方、「開化の良人」では先ず筑地居留地の銅版画に見られる開化時代の和洋折衷の調和の美が讃美される。

「ことに私などはこういう版画を眺めていると、三四十年前のあの時代が、まだ昨日のような心もちがして、今でも新聞をひろげて見たら、鹿鳴館の舞踊会の記事が出ていそうな気がするのです。実を言うとさっきこの陳列室へはいった時から、もう私はあの時代の人間がみんなまた生き返って、我々の眼にこそ見えないが、そこにもここにも歩いている。——そうしてその幽霊が時々我々の耳へ口をつけて、そっと昔の話を囁いてくれる。——そんな怪しげな考えがどうしても念頭を離れないのです。ことに今の洋服を着た菊五郎などは、余りよく私の友だちに似ているので、あの似顔絵の前に立った時は、ほとんど久潤を叙したいくらい、半ば気味の悪い懐しささえ感じました。どうです。お嫌でなかったら、その友だちの話でも聞いていただくとしましょうか」

そしてその友だちが「何しろいくら開化したと言ったところで日本ではめかけ妾と言うものが公然と幅を利かせているのだから」と囁いて「僕は愛のアムウルない結婚はしたくない」と言うのである。そしてこの主張は「僕が僕の利己心を満足させたいための主張じゃない。僕は愛をすべての上においた結果

だったのだ」と確信を以てこの主張をするのである。然しこの友だちは念願の「愛のある結婚」をしたものの結局は妻の不貞によって裏切られるのみであって、この世に「純粹の愛のみの結婚」は現実には在り得ないと分るのである。そして「僕はまた近ごろになって、すっかり開化なるものがいやになった」と友だちは言うのである。そして、

『君は昔、神風連が命を賭して争ったのも子供の夢だとけなしたことがある。じゃ君の眼からみれば、僕の結婚生活なども——』私『そうだ。やはり子供の夢だったかも知れない。が、今日我々の目標にしている開化も、百年の後になってみたら、やはり同じ子供の夢だろうじゃないか……』』

と結論づけてこの「開化の良人」の物語は終るのである。

芥川は大正7年7月に「開化の殺人」を発表するのであるがその1ヶ月前にブラウニング学者である白村を京都に訪ね、白村を褒めた手紙を書いている。そしてその翌8年2月に「開化の良人」を発表するのである。それから2年後大正10年に白村の「近代の恋愛観」が発表されるのである。白村の論に対して石田憲次等は強い反論を掲げたのであるがこの恋愛観は大正デモクラシーの一世を風靡することになったのである。然し芥川はこの「近代の恋愛観」に対して真向から皮肉な批判をするのである。それが彼の「或恋愛小説」である。この作品には「或は恋愛は至上なり」と言う副題がついているので明に白村の恋愛観に対する批判であることが分る。

「主筆 すると恋愛の讚美ですね。それははいよいよ結構です。厨川博士の『近代恋愛論』以来、一般に青年男女の心は恋愛至上主義に傾いていきますから。……もちろん近代的恋愛でしょうね？」

保吉 さあ、それは疑問ですね。近代的懷疑とか、近代的盜賊とか、近代的白髮染めとか——そういうものは確かに存在するでしょう。しかしどうも恋愛だけはイザナギイザナミの昔以来余り変わらないように思いま

すが。

主筆 それは理論の上だけです。たとえば三角関係などは近代的恋愛の一例ですからね。少なくとも日本の現状では。

保吉 ああ、三角関係ですか？ それは僕の小説にも三角関係は出てくるのです。」

芥川の「開化の殺人」、「開化の良人」も三角関係であり、ブラウニングの「The Statue and the Bust」も「My Last Duchess」も三角関係である。そして結局この「或恋愛小説」は、次のような問答で終るのである。

「主筆 堀川さん。あなたは一体真面目なのですか？

保吉 ええ、もちろん真面目です。世間の恋愛小説をご覧なさい。女主人公はマリアでなければクレオパトラじゃありませんか？ しかし人生の女主人公は必ずしも貞女じゃないと同時に、必ずしもまた姪婦でもないのです。もし人のいい読者のうちに、一人でもああいう小説を真に受ける男女があって御覧なさい。もっとも恋愛の円満に成就した場合は別問題ですが、万一失恋でもした日には必ず莫迦莫迦しい自己犠牲をするか、さもなければもっと莫迦莫迦しい復讐的精神を發揮しますよ。しかもそれを当事者自身は何か英雄的行為のように惚れ切っているのですからね。けれども私の恋愛小説には少しもそういう悪影響を普及する傾向はありません。」

「莫迦莫迦しい自己犠牲」とか「莫迦莫迦しい復讐的精神」とは三角関係を基にしたブラウニングの恋愛詩譚について言っていることは明である。

「私の恋愛小説には少しもそういう悪影響を普及する傾向はありません」と言う悪影響の中には白村への反論がこめられている。第三者の介在する三角関係の「近代的恋愛」について芥川は「侏儒の言葉」の中で次のように言っている。

「わたしは第三者と一人の女を共有することに不平を持たない。しかしそれは第三者と全然見ず知らずの間がらであるか、あるいは極疎遠の間がらであるか、どちらかであることを条件としている。

又

わたしは第三者を愛するために夫の目を偷んでいる女にはやはり恋愛を感じないことはない。しかし第三者を愛するために子供を顧みない女には満身の憎悪を感じている。

又

わたしを感傷的にするものはただ無邪気な子供だけである。」

これは近代的恋愛と言う舶来の開化思想に対する日本人の心情の反撥である。芥川は終生人間のエゴイズムと言う問題に取り組み、自分の雅号を「我鬼」と名づけた。男女の愛にはどうしてもエゴイズムと言う醜い「我鬼」がつきまとう。それに較ぶれば親子の愛はもっと清らかだと言う日本人的「優情」の「道徳的噴激」を芥川は感じているのである。

「開化」と共に入ってきた舶来思想は「新にして奇なる」ものであった。芥川はブラウニングのメセデの中に「強い個性の尊重」を見てブラウニングの持つ「新しさ」に引きつけられた。この「新なる」思想には思想自体としては醜悪なエゴイズムは見られないからである。然しブラウニングの恋愛観と言うメセデの中にはこのエゴイズムを見て取った。これは「新」ではあるが又同時に「奇」なるものであることに気づいたからである。然し芥川より一代代先にあった上田敏、厨川白村はブラウニングの受容に際してその「奇」なる異質の問題には気がつかなかった。